

天草版『エソポのハブラス』の語彙の特色

—— 基幹語彙の視点で天草版『平家物語』・『平家物語』〈高野本〉と比較する ——

濱千代 いづみ

キーワード：エソポのハブラス 基幹語彙 使用率 段階

1 はじめに

この研究の目的は、天草版『エソポのハブラス』の自立語の語彙の特色を計量的な方面から捉えることである。平成12年に天草版『平家物語』の自立語の語彙、平成21年に天草版『エソポのハブラス』の助動詞の語彙について、各見出し語の使用率を計算し、段階に分けて、作品の骨格部分をなす語集団という視点から作品の語彙の特色を解明した。^(注1)平成23年2月には統計上のいろいろな指標を利用して、天草版『エソポのハブラス』と天草版『平家物語』の自立語の語彙の豊富さ・語彙の類似度・語彙の偏りをはかり、作品の語彙の傾向を探った。^(注2)今回は、天草版『エソポのハブラス』の自立語の語彙について、各見出し語の使用率を計算し、段階に分けて、作品の骨格部分をなす語集団という視点から作品の語彙の特色を探索することに努める。そのために天草版『平家物語』、『平家物語』〈高野本〉との比較を行い、段階の見直しをする。

計量には次の文献を利用し、単語の認定の基準を一致させるようにした。

- a 『エソポのハブラス本文と総索引』
- b 『天草版平家物語語彙用例総索引』
- c 『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（自立語篇）

天草版『エソポのハブラス』と天草版『平家物語』は、それぞれ「扉・序・物語の本文・目録」の四部によって構成されている。このうちの物語の本文に使われている自立語を対象とする。cは新日本古典文学大系『平家物語』をもとに作成してある。

略称として次のものを用いる。

- 〈エソポ〉〈エ〉・・・天草版『エソポのハブラス』
- 〈ヘイケ〉〈へ〉・・・天草版『平家物語』
- 〈高野本〉〈高〉・・・『平家物語』〈高野本〉

2 研究の方法と天草版『エソポのハブラス』の基幹語彙

ある言語資料を対象とした語彙調査を行った場合に得られる、骨格部分をなす語集団を「基幹語彙」と呼ぶことにする。基幹語彙はその言語資料で大きな使用率で使われる語集団である。その中には他の言語資料にも現われるものと、この言語資料にのみ特徴的によく現われるものがある。

平成12年に天草版『平家物語』の自立語の語彙の特色を把握するにあたり、『平家物語』〈高野本〉を比較に用いて、作品ごとに、自立語全体の中における各語の使用率（各語の使用度数÷自立語全部の使用度数×1000）を計算し、それによって9段階に分けるという手法をとった。使用率が1.00パーミル以上2.00パーミル未満に入るものの段階を「5」とし、それを基準にして、高い方は段階ごとに使用率の幅を2倍・4倍というように広げていき、低い方は2分の1・4分の1というように狭めていく。これにゼロを加えて、10段階に分けた。この分け方を天草版『エソポのハブラス』にも応用してみる。各段階の使用率の範囲、各作品の使用度数・異なり語数を示すと、次のようになる。

表1 使用率による9段階の分類

段階	使用率の範囲：a	〈エソポ〉		〈ヘイケ〉		〈高野本〉	
	単位：パーミル	使用度数	異なり語数	使用度数	異なり語数	使用度数	異なり語数
9	$16.00 \leq a$	277～	3	754～	4	2024～	1
8	$8.00 \leq a < 16.00$	96～181	10	384～716	7	989～1469	5
7	$4.00 \leq a < 8.00$	50～79	15	200～350	9	422～746	11
6	$2.00 \leq a < 4.00$	24～44	42	95～183	32	206～378	27
5	$1.00 \leq a < 2.00$	12～23	87	47～93	101	100～197	71
4	$0.50 \leq a < 1.00$	6～11	214	24～46	170	50～99	160
3	$0.25 \leq a < 0.50$	3～5	464	12～23	340	25～49	343
2	$0.125 \leq a < 0.25$	2	461	6～11	717	13～24	662
1	$0.00 < a < 0.125$	1	1608	1～5	6041	1～12	13504
0	$0.00 = a$	0	...	0	...	0	...
異なり語数の合計			2904		7421		14784

作品の異なり語数が多くなると使用率の小さい語が多くなる。上記の表で、1の段階の範囲に入る語が〈エソポ〉では全体の55.4%であるのに対し、〈ヘイケ〉では全体の

81.4%にも至る。〈高野本〉ではさらに高く、全体の91.3%を占める。しかし、作品の異なり語数の多少にかかわらず、一定の使用率以上の語数はあまり変わらない。上記の表で、2の段階以上の語数は〈エソボ〉で1296語、〈ヘイケ〉で1380語、〈高野本〉で1280語となり、大きな差はない。

このような特徴を踏まえて、今回は〈エソボ〉の語彙の特色を把握するのに使用率に加えて順位という基準を設けることにする。各作品の語彙を使用度数の多い順に並べ、上位50語を選出し、この語群を第一基幹語彙とする。そして、51位以下で5の段階（使用率1.00パーミル以上）までに属する語を第二基幹語彙とする。〈エソボ〉の第一基幹語彙、第二基幹語彙を示すと、表2、表3のようになる。

表中、〈ヘイケ〉〈高野本〉で第一基幹語彙に入るものには「A」、第二基幹語彙に入るものには「B」の印を付ける。

表2 〈エソボ〉の第一基幹語彙

エ 順位	見出し語	漢字	品詞	文法	エ 度数	エ 使用率	エ 段階	へ 度数	へ 段階	へ 印	高 度数	高 段階	高 印
1	いふ	言	動	四段	378	32.170	9	822	9	A	704	7	A
2	こと	事	名		323	27.489	9	844	9	A	989	8	A
3	その	其	連体		277	23.574	9	507	8	A	746	7	A
4	あり	有	動	ラ変	181	15.404	8	1000	9	A	1469	8	A
5	す	為	動	サ変	174	14.809	8	545	8	A	1007	8	A
6	もの	物・者	名		153	13.021	8	408	8	A	500	7	A
7	この	此	連体		140	11.915	8	384	8	A	591	7	A
8	なし	無	形	ク活	139	11.830	8	388	8	A	654	7	A
9	エソボ		固人		133	11.319	8	0	0		0	0	
10	とき	時	名		114	9.702	8	153	6	A	352	6	A
11	これ	此	名	代名	105	8.936	8	427	8	A	746	7	A
12	ひと	人	名		104	8.851	8	350	7	A	559	7	A
13	ある	或	連体		96	8.170	8	38	4		64	4	
14	まうす	申	動	四段	79	6.723	7	754	9	A	1170	8	A
15	おもふ	思	動	四段	78	6.638	7	341	7	A	494	7	A
16	われ	我	名	代名	72	6.128	7	84	5	B	157	5	B
17	したごころ	下心	名		69	5.872	7	0	0		0	0	
18	おほかめ	狼	名		65	5.532	7	0	0		0	0	
19	かの	彼	連体		63	5.362	7	35	4		145	5	B
20	みる	見	動	上一	62	5.277	7	272	7	A	422	7	A
21	ところ	所・処	名		62	5.277	7	147	6	A	324	6	A
22	わが	我	連体		61	5.191	7	51	5	B	129	5	B
23	シヤント		名	固人	60	5.106	7	0	0		0	0	
24	また	又	接		59	5.021	7	162	6	A	251	6	A
25	み	身	名	代名	55	4.681	7	98	6	A	186	5	A
26	それ	其	名	代名	55	4.681	7	87	5	B	140	5	B
27	ござる	御座	動	四段	52	4.426	7	716	8	A	0	0	
28	く	来	動	カ変	50	4.255	7	48	5	B	19	2	

エ 順位	見出し語	漢字	品詞	文法	エ 度数	エ 使用率	エ 段階	へ 度数	へ 段階	へ 印	高 度数	高 段階	高 印
29	きつね	狐	名		44	3.745	6	0	0		1	1	
30	さて	然	接		41	3.489	6	147	6	A	144	5	B
31	いかに	如何	副		40	3.404	6	87	5	B	259	6	A
32	こころ	心	名		39	3.319	6	118	6	A	239	6	A
33	ゐる	居	動	上一	37	3.149	6	113	6	A	30	3	
34	おほきなり	大	形動	ナリ	37	3.149	6	42	4		84	4	
35	きく	聞	動	四段	35	2.979	6	162	6	A	194	5	A
36	およぶ	及	動	四段	35	2.979	6	77	5	B	184	5	B
37	づ	出	動	下二	34	2.894	6	101	6	A	0	0	
38	しゅじん	主人	名		34	2.894	6	0	0		0	0	
39	なる	成	動	四段	33	2.809	6	287	7	A	540	7	A
40	なか	中	名		33	2.809	6	95	6	B	229	6	A
41	なす	為	動	四段	33	2.809	6	38	4		114	5	B
42	すこし	少	副		33	2.809	6	22	3		60	4	
43	いぬ	犬	名		33	2.809	6	0	0		0	0	
44	ただ	只	副		32	2.723	6	115	6	A	206	6	A
45	いま	今	名		31	2.638	6	158	6	A	340	6	A
46	やう	様	名		31	2.638	6	46	4		73	4	
47	ひつじ	羊	名		31	2.638	6	0	0		0	0	
48	とる	取	動	四段	29	2.468	6	136	6	A	250	6	A
49	もつ	持	動	四段	29	2.468	6	47	5	B	217	6	A
50	こたふ	答	動	下二	29	2.468	6	8	2		16	2	

表 3 〈エソポ〉の第二基幹語彙

エ 順位	見出し語	漢字	品詞	文法	エ 度数	エ 使用率	エ 段階	へ 度数	へ 段階	へ 印	高 度数	高 段階	高 印
51	なんと	何	副		28	2.383	6	123	6	A	1	1	
52	くらふ	食	動	四段	28	2.383	6	1	1		0	0	
53	うち	内・中	名		27	2.298	6	133	6	A	251	6	A
54	くに	国	名		27	2.298	6	19	3		64	4	
55	ろば	驢馬	名		27	2.298	6	0	0		0	0	
56	うへ	上	名		26	2.213	6	66	5	B	186	5	A
57	しる	知	動	四段	26	2.213	6	102	6	A	181	5	B
58	とふ	問	動	四段	26	2.213	6	53	5	B	74	4	
59	なんぢ	汝	名	代名	26	2.213	6	29	4		54	4	
60	なぜに	何故	副		26	2.213	6	36	4		0	0	
61	われら	我等	名	代名	25	2.128	6	15	3		43	3	
62	ていわう	帝王	名		25	2.128	6	19	3		8	1	
63	ねずみ	鼠	名		25	2.128	6	0	0		2	1	
64	ほど	程	名		24	2.043	6	54	5	B	253	6	A
65	かへる	帰・返	動	四段	24	2.043	6	66	5	B	124	5	B
66	ゆく	行	動	四段	24	2.043	6	55	5	B	95	4	
67	まづ	先	副		24	2.043	6	59	5	B	86	4	
68	ただいま	只今	名		24	2.043	6	42	4		67	4	
69	けだもの	獣	名		24	2.043	6	5	1		5	1	
70	しし	獅子	名		24	2.043	6	0	0		0	0	
71	のち	後	名		23	1.957	5	106	6	A	247	6	A

エ 順位	見出し語	漢字	品詞	文法	エ 度数	エ 使用率	エ 段階	へ 度数	へ 段階	へ 印	高 度数	高 段階	高 印
72	ちから	力	名		23	1.957	5	38	4		75	4	
73	いへ	家	名		23	1.957	5	24	4		52	4	
74	ため	為	名		22	1.872	5	57	5	B	142	5	B
75	さき	先・前	名		22	1.872	5	81	5	B	130	5	B
76	おく	置	動	四段	22	1.872	5	61	5	B	105	5	B
77	ひとつ	一	名		22	1.872	5	40	4		82	4	
78	ししわう	獅子王	名		21	1.787	5	0	0		0	0	
79	つかまつる	仕	動	四段	20	1.702	5	80	5	B	96	4	
80	かなふ	叶	動	四段	20	1.702	5	59	5	B	82	4	
81	よし	良	形	ク活	20	1.702	5	55	5	B	78	4	
82	ここ	此处	名	代名	20	1.702	5	70	5	B	64	4	
83	おのおの	各々	名		20	1.702	5	19	3		52	4	
84	ぎ	義	名		20	1.702	5	2	1		5	1	
85	ふしん	不審	名		20	1.702	5	3	1		3	1	
86	いく	行	動	四段	20	1.702	5	18	3		0	0	
87	たちまち	忽	副		20	1.702	5	3	1		0	0	
88	まへ	前	名		19	1.617	5	46	4		62	4	
89	ころす	殺	動	四段	19	1.617	5	3	1		9	1	
90	くださる	下	動	下二	19	1.617	5	54	5	B	0	0	
91	ひとびと	人々	名		18	1.532	5	98	6	A	185	5	A
92	おほす	仰	動	下二	18	1.532	5	183	6	A	153	5	B
93	いのち	命	名		18	1.532	5	93	5	B	129	5	B
94	こゑ	声	名		18	1.532	5	42	4		77	4	
95	からす	烏	名		18	1.532	5	0	0		3	1	
96	うま	馬	名		18	1.532	5	161	6	A	0	0	
97	いちにん	一人	名		17	1.447	5	72	5	B	107	5	B
98	ににん	二人	名		17	1.447	5	38	4		69	4	
99	すなはち	即	副		17	1.447	5	13	3		39	3	
100	はら	腹	名		17	1.447	5	21	3		29	3	
101	おん	恩	名		17	1.447	5	16	3		20	2	
102	おのれ	己	名	代名	17	1.447	5	9	2		9	1	
103	それがし	某	名	代名	17	1.447	5	31	4		3	1	
104	はわ	母	名		17	1.447	5	15	3		0	0	
105	やぎう	野牛	名		17	1.447	5	0	0		0	0	
106	ほか	外	名		16	1.362	5	63	5	B	91	4	
107	みち	道	名		16	1.362	5	41	4		79	4	
108	ことごとく	悉	副		16	1.362	5	7	2		16	2	
109	あた	怨	名		16	1.362	5	3	1		10	1	
110	にはとり	鶏	名		16	1.362	5	2	1		10	1	
111	しか	鹿	名		16	1.362	5	12	3		4	1	
112	まだ	未	副		16	1.362	5	44	4		2	1	
113	わし	鷲	名		16	1.362	5	0	0		0	0	
114	いる	入	動	四段	15	1.277	5	88	5	B	148	5	B
115	かく	掛	動	下二	15	1.277	5	63	5	B	133	5	B
116	おほし	多	形	ク活	15	1.277	5	50	5	B	126	5	B
117	ぞんず	存	動	サ変	15	1.277	5	79	5	B	53	4	
118	ことば	言葉	名		15	1.277	5	18	3		28	3	
119	とり	鳥	名		15	1.277	5	8	2		22	2	

エ 順位	見出し語	漢字	品詞	文法	エ 度数	エ 使用率	エ 段階	へ 度数	へ 段階	へ 印	高 度数	高 段階	高 印
120	あたり	辺	名		15	1.277	5	17	3		11	1	
121	たてまつる	奉	動	四段	14	1.191	5	230	7	A	631	7	A
122	こ	子	名		14	1.191	5	45	4		109	5	B
123	あまた	数多	名		14	1.191	5	29	4		48	3	
124	ゆるす	許	動	四段	14	1.191	5	29	4		41	3	
125	なん	何	名	代名	14	1.191	5	21	3		25	3	
126	のむ	飲	動	四段	14	1.191	5	6	2		12	1	
127	まらする		動	サ変	14	1.191	5	328	7	A	0	0	
128	て	手	名		13	1.106	5	53	5	B	114	5	B
129	むかふ	向	動	四段	13	1.106	5	69	5	B	102	5	B
130	みづ	水	名		13	1.106	5	42	4		78	4	
131	なに	何	名	代名	13	1.106	5	35	4		54	4	
132	ひらく	開	動	四段	13	1.106	5	23	3		30	3	
133	くち	口	名		13	1.106	5	11	2		24	2	
134	をしふ	教	動	下二	13	1.106	5	4	1		11	1	
135	そなた	其方	名	代名	13	1.106	5	9	2		4	1	
136	あり	蟻	名		13	1.106	5	0	0		1	1	
137	ぬすびと	盗人	名		13	1.106	5	0	0		1	1	
138	まゐる	参	動	四段	12	1.021	5	204	7	A	378	6	A
139	みゆ	見	動	下二	12	1.021	5	112	6	A	237	6	A
140	よ	世・代	名		12	1.021	5	109	6	A	210	6	A
141	よし	由	名		12	1.021	5	59	5	B	187	5	A
142	やがて	臈而	副		12	1.021	5	106	6	A	176	5	B
143	しぬ	死	動	ナ変	12	1.021	5	51	5	B	71	4	
144	たれ	誰	名	代名	12	1.021	5	30	4		64	4	
145	なにごと	何事	名		12	1.021	5	51	5	B	62	4	
146	いたす	致	動	四段	12	1.021	5	19	3		38	3	
147	ぎ	儀	名		12	1.021	5	52	5	B	32	3	
148	まこと	誠	名		12	1.021	5	13	3		21	2	
149	こころう	心得	動	下二	12	1.021	5	22	3		19	2	
150	さと	里	名		12	1.021	5	2	1		11	1	
151	あたふ	与	動	下二	12	1.021	5	2	1		9	1	
152	そば	側	名		12	1.021	5	11	2		7	1	
153	だうり	道理	名		12	1.021	5	5	1		7	1	
154	あな	穴	名		12	1.021	5	1	1		1	1	
155	つま	妻	名		12	1.021	5	1	1		1	1	
156	はと	鳩	名		12	1.021	5	0	0		1	1	
157	バビロニヤ		名	固地	12	1.021	5	0	0		0	0	

〈エソポ〉の第一基幹語彙は「言ふ」「こと」「その」から「取る」「持つ」「答ふ」までの50語で、9の段階から6の段階までに属している。また、〈エソポ〉の第二基幹語彙は「なんと」「食らふ」「うち」から「妻」「鳩」「バビロニヤ」までの107語で、6・5の段階に属している。これらが〈エソポ〉という作品の骨格部分をなす語集団である。

なお、〈ヘイケ〉の第一基幹語彙は使用度数98で6の段階の「み(身)」「人々」までの51語であり、第二基幹語彙は使用度数47で5の段階の「持つ」までの102語である。

また、〈高野本〉の第一基幹語彙は使用度数185で5の段階の「人々」までの50語であり、第二基幹語彙は使用度数100で5の段階の「承る」までの65語である。

3 〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉で第一・第二基幹語彙の語

〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉全部で第一基幹語彙に入るのは次の23語である。

[名詞] こと、もの、時、人、所、身、心、今、これ

[動詞] 言ふ、あり、す、申す、思ふ、見る、聞く、成る、取る

[形容詞] なし

[副詞] ただ

[接統詞] また

[連体詞] その、この

これらは当時の日常語としてよく用いられた語群である。また、平安時代の源氏物語を調べても使用度数は多い。中には意味や用法・活用の変化を伴うものもあるが、現代語としてもよく用いる語群で、日本語のなかの基礎語である。

〈エソボ〉で第一基幹語彙、〈ヘイケ〉〈高野本〉で第二基幹語彙までに入るのは次の8語である。

[名詞] われ、なか、それ

[動詞] およぶ、持つ

[副詞] いかに

[接統詞] さて

[連体詞] わが

〈エソボ〉で第二基幹語彙、〈ヘイケ〉〈高野本〉で第二基幹語彙までに入るのは次の25語である。

[名詞] うち、うへ、ほど、のち、ため、さき、人々、いのち、いちにん、手、世、由、馬

[動詞] 知る、かへる、置く、おほす、入る、掛く、奉る、向かふ、参る、見ゆ

[形容詞] 多し

[副詞] やがて

これらも当時の日常語としてよく用いられた語群である。しかし、これらの中には源氏物語では使用度数の多くない漢語名詞の「いちにん」や敬語の「おほす」、現代語としては硬い印象のある「わが」も含まれる。

4 〈エソポ〉で第一・第二基幹語彙、〈ヘイケ〉〈高野本〉で0・1・2の段階の語

4. 1 〈エソポ〉で第一基幹語彙、〈ヘイケ〉〈高野本〉で0・1・2の段階の語

〈エソポ〉で第一基幹語彙に入るが、〈ヘイケ〉〈高野本〉の2作品で0・1・2の段階に入るのは次の9語である。

[名詞] したごころ、狼、狐、主人、犬、羊、エソポ、シャント

[動詞] 答ふ

これらの語が〈エソポ〉の中でどのように使われているのか見てみよう。「エソポ」はこの作品の主人公の名前、「シャント」は学者でエソポの主人となった人物の名前で、2つとも固有名詞である。「主人」も登場人物で、シャントを表すことが多い。「狼」「狐」「犬」「羊」はエソポが伝えたとされる数々の寓話に登場する動物たちである。また、寓話の後に、寓話の裏に隠れている意味や寓話から学ぶ人生訓について述べてあるが、その記述の始めに「したごころ」の語が置かれている。「答ふ」は問いかけに対して答える場合によく用いられ、「答へて言ふ」「答へて申す」という形をとることが多い。ここに挙がった語群は〈エソポ〉という作品に登場する人物や動物、寓話の記述形式に関わるものである。

4. 2 〈エソポ〉で第二基幹語彙、〈ヘイケ〉〈高野本〉で0・1の段階の語

〈エソポ〉で第二基幹語彙に入るが、〈ヘイケ〉〈高野本〉の2作品で0・1の段階に入るのは次の25語である。

[名詞] ろば、ねずみ、けだもの、獅子、獅子王、義、不審、からす、野牛、
あた、鶏、鷲、蟻、盗人、里、道理、穴、妻、鳩、バビロニヤ

[動詞] 食らふ、殺す、教ふ、与ふ

[副詞] たちまち

これらのうち、「ろば」「ねずみ」「けだもの」「獅子」「獅子王」「からす」「野牛」「鷲」「鷲」「盗人」「鳩」の12語は寓話に登場する動物と人物であり、「妻」はエソポの主人の妻を表すことが多い。〈エソポ〉には妻の意味を表す言葉として「妻」のほかに「女房」(使用度数10)が見られるが、「内儀」「奥方」「奥様」「家内」や〈ヘイケ〉〈高野本〉にある「北の方」は見られない。「里」はエソポの生涯にも寓話にも現われ、「アモニヤといふ里」「その里」のように使われ、舞台となる場所を示す。「バビロニヤ」はエソポの赴いた土地の名である。「穴」は動物のすみかを表すことが多く、「食らふ」は動物が動物を食べる場合に用いられる。「不審」「あた」「道理」は相手や事態に対する心の動きや判断を表す場合に用いられる。「殺す」は命をとるという意味で人間にも動

物にも広く使われている。類義の語に「切る」「うつ」がある。その使用度数は「切る」(エ2、へ68、高109)、「うつ」(エ5、へ110、高228)である。〈エソボ〉で使用度数が少ないが、「切る」は〈ヘイケ〉〈高野本〉でともに第二基幹語彙に入り、「うつ」はともに第一基幹語彙に入る。「義」は棺 槨^{くわんくわく}の文字の意味が問題となる段によく現われ、一話に集中しているが、結果としてここに挙げた。また、「たちまち」には別に「たちまちに」の形の語もあり、〈高野本〉で使用度数33、3の段階に入っている。ここに挙げた語群は〈エソボ〉という作品に登場する人物や動物、作品の舞台となった場所、動物の食住に関わるもの、心の動きや判断を表すものである。

5 〈エソボ〉〈ヘイケ〉で第一・第二基幹語彙、〈高野本〉で0・1・2の段階の語

〈エソボ〉〈ヘイケ〉の2作品で第一基幹語彙に入るが、〈高野本〉で0・1・2の段階に入るのは次の2語である。

[動詞] ござる、出^づ

〈エソボ〉〈ヘイケ〉の2作品で第二基幹語彙までに入るが、〈高野本〉で0・1の段階に入るのは次の3語である。

[動詞] くださる、まらする

[副詞] なんと

これらのうち、「ござる」「くださる」「まらする」は敬語の変遷が現われたもの、「出」「なんと」は音韻の変化が現われたものである。近藤・濱千代(2000)で〈高野本〉の「さうらふ」が〈ヘイケ〉の「ござる」「まらする」と多く対応することを指摘した。そこで〈エソボ〉の「くださる」が国字本『伊曾保物語』(〈伊曾保〉と略す^(注5))でどのような語句と対応するか調査してみよう。〈エソボ〉の「くださる」19例のうち、〈伊曾保〉に近い形で対応する個所が存するのは10例である。

本動詞の用法・・・「与へ給ふ」2、「賜る」1、「たぶ」1、「かうむる」1、

「持ち来たらせ給ふ」1、「宣旨をくださる」に対し「仰せ付けられ候ふ」1

補助動詞の用法・・・「たぶ」2、「給ふ」1

いくつかの形の対応が見られるが、「くださる」は「給ふ」「たぶ」とよく対応していると指摘できる。

なお、〈エソボ〉〈高野本〉で第一・第二基幹語彙、〈ヘイケ〉で0・1・2の段階の語は存しない。

6 〈エソボ〉で0・1・2の段階、〈ヘイケ〉〈高野本〉で第一・第二基幹語彙の語

〈エソボ〉で0・1・2の段階であるが、〈ヘイケ〉〈高野本〉の2作品で第一基幹語彙に入るのは次の2語である。括弧の中に使用度数を示す。

[名詞] 平家(エ0、へ258、高368)、 みやこ(エ2、へ200、高294)

「平家」は〈ヘイケ〉〈高野本〉に登場する主たる一門であり、2作品の内容に関連する語である。「みやこ」は〈ヘイケ〉〈高野本〉の舞台となる場所であり、平安時代の作品でもよく現われる語である。

〈エソボ〉で0・1の段階であるが、〈ヘイケ〉〈高野本〉の2作品で第二基幹語彙までに入るのは次の9語である。

[名詞] きみ(エ1、へ72、高183)、 夜(エ1、へ67、高123)

むかし(エ1、へ48、高144)、 法皇(エ0、へ83、高150)

源氏(エ0、へ67、高140)、 勢(エ0、へ62、高140)

袖(エ0、へ49、高107)

[動詞] 射る(エ1、へ52、高111)、 おぼしめす(エ0、へ48、高128)

「法皇」は〈ヘイケ〉〈高野本〉に登場する重要な人物であり、「源氏」は「平家」に對抗する一門である。「勢」「射る」は合戦の場でよく用いる語群である。これらは〈ヘイケ〉〈高野本〉の内容に関連する語である。

「きみ」「夜」「むかし」「袖」「おぼしめす」は平安時代の作品でもよく用いる語である。〈エソボ〉で夜や昼を表す語は「昼夜」(使用度数1)だけで、確かな時間帯を示す語がほとんど現れない。その代わり「ある時」というように日時をはっきりと示さない言い方を多用する。

ここに挙げた語群は〈ヘイケ〉〈高野本〉の2作品の内容に関連する語、平安時代の作品でもよく用いる語である。

7 〈エソボ〉〈ヘイケ〉で0・1・2の段階、〈高野本〉で第一・第二基幹語彙の語

〈エソボ〉〈ヘイケ〉の2作品で0・1・2の段階であるが、〈高野本〉で第一基幹語彙に入るのは次の4語である。括弧の中に使用度数を示す。

[動詞] たまふ(エ0、へ9、高2024)、 さうらふ(エ0、へ0、高1458)

のたまふ(エ0、へ1、高343)、 おはす(エ0、へ2、高209)

〈エソボ〉〈ヘイケ〉の2作品で0・1の段階であるが、〈高野本〉で第二基幹語彙までに入るのは次の5語である。

[名詞] かたき(エ0、へ2、高132)、 入道相国(エ0、へ0、高115)

[動詞] さぶらふ(エ0、へ0、高143)、 まします(エ1、へ1、高138)

〔接統詞〕 さるほどに（エ0、へ5、高101）

上記のうち「たまふ」「さうらふ」「のたまふ」「おはす」「さぶらふ」「まします」の6語は話し言葉における敬語の変遷に関連する語群である。「さうらふ」については第5章で触れたが、近藤・濱千代（2000）で〈高野本〉の「たまふ」が〈ヘイケ〉の「る（らる）」と、「のたまふ」は「言はる」「仰せらる」と、「おはす」は「ゐらる」と多く対応することを指摘した。そこで、「さぶらふ」と「まします」について検討しよう。

〈高野本〉で「さぶらふ」は女性が用い、「さうらふ」は男性が用いるという使い分けがある。「さぶらふ」も「さうらふ」の場合と同様に〈ヘイケ〉の「ござる」「まらする」と多く対応する。ところで、〈エソボ〉には女性のことばが少ない。シャントの妻がシャントに向かって言う会話の中に「今よりして夫とも頼みまらすまい。」（422-9）があり、「さぶらふ」に相当する語としては「まらする」1例を見ることができる。

「まします」は〈高野本〉で神仏・皇族・高位の貴族・平家一門、会話文で源氏の上位の武士を遇するのによく用いられる。しかし、〈高野本〉で「まします」の現われる章段や部分が、〈ヘイケ〉では省かれていることが多い。〈ヘイケ〉に対応箇所のある20例について見ると、次のように「ござる」とよく対応している。

「ござる」15、「せらるる」2、「おちやる」1、敬語なし2

一方、〈ヘイケ〉の「まします」1例は部下の盛俊から主人の平宗盛への会話に現れ、〈高野本〉でその部分は簡略になっており、対応する語句を見出せない。〈エソボ〉ではイソップがアテネの人々に例えを引いて述べる中に「主君にてまします鶴」（455-1）がある。〈伊曽保〉ではその部分が簡略に表現され、鶴が鳶になっている。また、〈伊曽保〉に「まします」は現れない。「まします」は『日葡辞書』に「デウス、サントス、貴人などのことを言うのにもちいられる。文書語。」と記載されている。〈ヘイケ〉〈エソボ〉の例は「まします」の持つ硬い印象を利用した用法と考える。

「かたき」は合戦の場でよく用いる語であるが、〈ヘイケ〉では少ない。「かたき」を漢字表記にすると、「敵」「仇」のようになる。その中の「敵」の音読みの「てき」が〈エソボ〉にも見られ、その使用度数は（エ5、へ48、高29）で、段階は（エ3、へ6、高3）である。室町時代末期の話し言葉では「かたき」より「てき」を用いるように変化していた。「入道相国」は平清盛の呼称で、『平家物語』に登場する重要な人物である。

〈高野本〉では「清盛公」「浄海」など平清盛にさまざまな呼称が使われているが、その中でも「入道相国」が多い。しかし、〈ヘイケ〉では人物の呼称を統一するという方針のもとに作成し、平清盛の呼称として「清盛」をよく用いている。そのため〈エソボ〉

〈ヘイケ〉で共通に使用度数がゼロになった。これらは〈ヘイケ〉〈高野本〉の内容に

関連する語であるが、語使用の変化、作品の編集方針の相違を反映してここに挙げた。

「さるほどに」は〈高野本〉で先行の事柄に続いて後続の事柄が起こることを示す場合や、話の発端や冒頭において書き起こす場合に用いられる。〈ヘイケ〉の5例の対応箇所を〈高野本〉で見ると「さるほどに」が2例、異文が3例である。4例は話の発端や冒頭において書き起こす用法であるが、次の1例は異なっている。頼朝から重衡への会話に現れ、〈高野本〉では接続助詞「ども」を用いて接続している。

平家を滅ぼし奉らうこと案の内でござった。さるほどに目の前にかやうに見参に入らうとは思ひも寄らなんだれども、（〈へ〉300-20）

『日本国語大辞典』に「先行の事柄を受けて感想を語り出す時に用いる。感動の気持を含む。さてもさても。」という説明があり、浮世草子が引用されている。上の例はこれと近いと考える。

「さるほどに」は〈伊曾保〉に16例あるが、そのうちの14例は章段の冒頭にあって「さて」と書き起こすのに用いられ、2例が先行の事柄との関係を示すのに用いられている。〈エソボ〉でこれらに対応する箇所を見ると、対応する語のない場合が多く、確実に指摘できるのは「さて」「かくて」各1例である。一方、〈エソボ〉では話の発端や冒頭に「ある時」「ある人」のように連体詞アル+名詞の形を置くことが多い。そして、この形は〈伊曾保〉にもよく現れている。^(注6)「さるほどに」は室町時代末期に文語的語感で先行の事柄に続いて後続の事柄が起こることを示す場合や、話の発端や冒頭において書き起こす場合に用いられた。それゆえ、〈エソボ〉には現われず、ここに挙げた。

8 〈エソボ〉〈高野本〉で0・1・2の段階、〈ヘイケ〉で第一・第二基幹語彙の語

〈エソボ〉〈高野本〉の2作品で0・1・2の段階であるが、〈ヘイケ〉で第一基幹語彙に入るのは次の語である。括弧の中に使用度数を示す。

〔名詞〕 清盛（エ0、へ108、高10）

〈エソボ〉〈高野本〉の2作品で0・1の段階であるが、〈ヘイケ〉で第二基幹語彙までに入るのは次の3語である。

〔名詞〕 喜（エ0、へ73、高0）、 右馬（エ0、へ70、高0）

成親卿（エ0、へ55、高0）

「成親卿」も「清盛」と同様に『平家物語』に登場する重要な人物である。この2語は人物の呼称を統一するという〈ヘイケ〉の方針によって多用された。また、〈ヘイケ〉は話し手の喜一検校と聞き手の右馬の允との対談形式で話が進行する。「喜」「右馬」はそれぞれの略称である。この2語は〈ヘイケ〉で『平家物語』を対談形式で語るために創

造された人物である。ここに挙げたのは〈ヘイケ〉の編集方針にかかわる語群である。

9 おわりに

作品の骨格部分をなす語集団（基幹語彙）という観点から、作品の語彙の特色を探求することに努めた。今回、〈エソボ〉の語彙の特色を把握するのに、使用率によって9段階に分けるという手法に加えて順位という基準を設けた。各作品の語彙を使用度数の多い順に並べ、上位50語を選出し、この語群を第一基幹語彙とし、51位以下で5の段階（使用率1.00パーミル以上）までに属する語を第二基幹語彙とした。この方法で得た結果は次のものである。

- (a) 〈エソボ〉の第一基幹語彙は「言ふ」「こと」「その」から「取る」「持つ」「答ふ」までの50語で、9の段階から6の段階までに属している。また、〈エソボ〉の第二基幹語彙は「なんと」「食らふ」「うち」から「妻」「鳩」「バビロニヤ」までの107語で、6・5の段階に属している。これらが〈エソボ〉という作品の骨格部分をなす語集団である。

〈エソボ〉の第一・第二基幹語彙を〈ヘイケ〉〈高野本〉と比較することで次の点が判明した。

- (b) 「こと」「言ふ」「その」など3作品全部で第一基幹語彙に入るものは、当時の日常語としてよく用いられた語群である。これらは平安時代の源氏物語を調べても使用度数は多く、現代語としてもよく用いる語群で、日本語のなかの基礎語である。
- (c) 「なか」「さて」など3作品全部で第二基幹語彙までに入るものも、当時の日常語としてよく用いられた語群である。しかし、源氏物語で使用度数の多くない漢語名詞の「いちにん」や敬語の「おほす」、現代語としては硬い印象の「わが」も含まれる。
- (d) 〈エソボ〉で第一・第二基幹語彙に入るが〈ヘイケ〉〈高野本〉で0・1・2の段階に入るものは、「エソボ」「狼」など〈エソボ〉という作品に登場する人物や動物、「したごころ」「答ふ」など寓話の記述形式に関わるもの、「里」「バビロニヤ」など作品の舞台となった場所、「食らふ」「穴」など動物の食住に関わるもの、「不審」「あた」など心の動きや判断を表すものである。
- (e) 〈エソボ〉〈ヘイケ〉で第一・第二基幹語彙に入るが〈高野本〉で0・1・2の段階に入るものは、「ござる」「くださる」など敬語の変遷が現われたもの、「出」「なんと」のように音韻の変化が現われたものである。

〈エソボ〉で0・1・2の段階の語彙を〈ヘイケ〉〈高野本〉と比較することで次の

点が判明した。

- (f) 〈エソボ〉で0・1・2の段階に入るが〈ヘイケ〉〈高野本〉で第一・第二基幹語彙に入るものは、「平家」「法皇」「射る」など〈ヘイケ〉〈高野本〉の内容に関連するもの、「みやこ」「きみ」「夜」など平安時代の作品でもよく用いるものである。
- (g) 〈エソボ〉〈ヘイケ〉で0・1・2の段階に入るが〈高野本〉で第一・第二基幹語彙に入るものは、「たまふ」「さうらふ」など話し言葉における敬語の変遷に関連するもの、「かたき」「入道相国」のように〈ヘイケ〉〈高野本〉の内容に関連する語でありながら語使用の変化、作品の編集方針の相違を反映したもの、「さるほどに」のように文語的語感を伴うようになったものである。
- (h) 〈エソボ〉〈高野本〉で0・1・2の段階に入るが〈ヘイケ〉で第一・第二基幹語彙に入るものは、「清盛」「成親卿」のように人物の呼称を統一するという〈ヘイケ〉の方針によって多用されたもの、「喜」「右馬」のように『平家物語』を対談形式で語るために〈ヘイケ〉で創造された人物で、すべて〈ヘイケ〉の編集方針にかかわる語群である。

〈エソボ〉の語彙の特色を把握することが目的的研究であったが、〈ヘイケ〉との比較を通して次の点も見えてきた。

- (i) 〈エソボ〉と〈ヘイケ〉はイエズス会の宣教師たちが日本語を習得するためのテキストとして作成された。しかし、〈エソボ〉の語彙だけでは合戦に生きる武士の語彙や宮廷に関わる語彙が不足し、〈ヘイケ〉の語彙だけでは町や農村に生きる人々の語彙が不足した。2つのテキストの語彙は互いに不足する部分を補完する形をとっている。

〈注記〉

注1 近藤政美・濱千代いづみ（2000）「天草版『平家物語』の語彙の特色——『平家物語』〈高野本〉との比較による——」（愛知県立大学大学院『国際文化研究科論集』第1号）、濱千代いづみ（2009）「天草版『エソボのハブラス』の助動詞の語彙——国字本『伊曾保物語』・天草版『平家物語』との比較を通して——」（『岐阜聖徳学園大学国語国文学』第28号）。

注2 濱千代いづみ（2011）「天草版『エソボのハブラス』・天草版『平家物語』の語彙の豊富さ、類似度、偏り」（『岐阜聖徳学園大学紀要〈教育学部編〉』第50集）。

注3 林（1971）では基本語彙をめぐって五つの概念が立てられ、その一つとして基幹語彙（ある語集団の基幹部として存在する語彙）という概念が提案された。真田

(1977) は基本語彙および基礎語彙に関しての概念を整理して基本語彙・基幹語彙・基礎語彙の三つの概念をまとめ、基幹語彙の定義を、ある特定語集団を対象としての語彙調査から直接に得られる、その語集団の骨格的部分集団とした。

注 4 「古典対照語い表」の数値を参照した。

注 5 調査には日本古典文学大系『仮名草子集』の「伊曾保物語」を用いた。国字本『伊曾保物語』と天草版『エソポのハブラス』とは共通の祖本としての文語本が存したであろうと考えられる。しかし、〈エソポ〉の下巻に相当する部分は〈伊曾保〉〈エソポ〉の収録寓話の異同が大きい。〈伊曾保〉全体は文語文が基調で、話し言葉を含んでいる。

注 6 〈伊曾保〉で章段の冒頭にある「さるほどに」14例のうち、12例はイソップの生涯を語る部分に現れ、2例が寓話部分に現れる。そして、寓話部分では章段の冒頭が「ある時」「ある一」の形式になる。

〈文献〉

大塚光信・来田隆（1999）『エソポのハブラス本文と総索引』 清文堂出版発行

大塚光信（1983）『キリシタン版エソポのハブラス私注』 臨川書店発行

近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ（1999）『天草版平家物語語彙用例総索引』 勉誠出版発行

近藤政美・武山隆昭・近藤三佐子（1996）『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（自立語篇） 勉誠社発行

真田信治（1977）「基本語彙・基礎語彙」岩波講座『日本語』9（語彙と意味）、岩波書店発行

小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典 第二版』6 小学館発行

土井忠生・森田武・長南実（1980）『邦訳日葡辞書』 岩波書店発行

林四郎（1971）「語彙調査と基本語彙」『電子計算機による国語研究 III』国研報告39、秀英出版発行

宮島達夫（1989）『フロッピー版古典対照語い表および使用法』 笠間書院発行

森田武（1965）校注・解説「伊曾保物語」（日本古典文学大系『仮名草子集』岩波書店発行）

横山英 監修（1975）『仮名草子伊曾保物語用語索引』 白帝社発行